

氏名 (フリガナ) : 于 昊甬 (ウ コウヨウ)

発表題目 : 伊藤蘭嶋の『春秋』観 —伊藤仁斎との比較を中心に—

要旨 (800 字以内) :

伊藤蘭嶋 (1694-1778) は古義学創始者・仁斎の第五子で、長兄東涯と共に「伊藤の首尾蔵」と称された。紀州藩儒となって以降「専ら経術を治むること」に転じ、仁斎・東涯の諸説を基盤に『詩古言』『書反正』『易本旨』『春秋聖旨』『読礼記』を完成させた。儒教五経における古義学の展開を遂げたのは蘭嶋である。

『春秋』学について、仁斎の『春秋経伝通解』は未完未刊に終わり、東涯には『春秋胡氏伝弁疑』等があるのみである。蘭嶋の『春秋聖旨』は古義学者による唯一の完全な『春秋』経解であり、古義堂の経学研究上重要な意義を持つ。

本論は『春秋聖旨』を核心テキストとし、『孟子私説』『一得録』等を参照して蘭嶋の『春秋』観を明らかにする。蘭嶋は「褒貶義例批判」や、経文を哀公十六年に終わるとすることで仁斎と一致するが、他の重要問題では明確に異同を示す。書名について仁斎の賛同する「四時を錯挙する」義ではなく、徂徠に近い「諸侯春朝秋請の義」に拠るとした。また『春秋』は仁斎の言う「夫子の創作に非ざる」ものではなく、隠公元年に起筆されながら未完の『魯春秋』を孔子が「続成」したものとする。『孟子』離婁下「王者の迹」章の解釈、「三伝」殊に『左氏伝』に対する認識、『春秋』以後の史書伝統の評価等でも仁斎と根本的に異なる。その結果、仁斎が見出そうとした「礼を以て権衡と為す」等の孔子の「義」は排除され、『春秋』は歴史の大事綱要を記す純粋な「史書」へと徹底された。

この『春秋』観は蘭嶋の経書認識と直結する。蘭嶋は『詩』『書』を夫子の「雅言」する所にして最重要の二経とし、殊に『書』を「治平の経法」「治教の典」、「後に伝ふべき者備さに載せざるは莫し、実に群経の祖、人極頼りて立つなり」と推崇した。蘭嶋は『書』を「政事の史」と称しており、同じ「史」でありながら『書』は経書の義理表現において『春秋』に対し代替的機能を有すると看做していた可能性がある。(計 796 字)